

〈論文〉

# 「實踐共同体」としての クラブ活動と参加者の学び

松尾 慎



## 摘要：

本論文將台灣某大學日本語文學系壘球隊的活動視為Lave&Wenger所提唱的「實踐共同体」，並且分析、考察在活動當中的學習情況。為此，利用了為了解明調查受訪者針對一個主題所抱有的意識以及形象塑造的研究手法「PAC分析」來進行分析和考察。受訪者為此壘球隊的畢業生以及現任球員共三名。

根據分析、考察得知，對於三名受訪者來說，壘球不光只是一種休閒活動，在他們的大學生活裡，壘球隊的地位相當明確，他們將壘球隊視為自我成長的場所。例如：A認為壘球隊是鍛鍊身心以及使自己日語進步的場所。B也認為在壘球隊需要動腦筋練習，在這場所能提升日語能力並且注重倫理等廣泛地培養自我實力。和A與B相異的是，對C而言，壘球隊與其說是鍛鍊的場所不如說是因為有趣進而琢磨技能並且提升精神力。這三名受訪者的共通點是透過壘球隊的活動學習到某些事物。就日語能力這一方面而言，提高日語能力並不是身為實踐共同体也就是壘球隊的一份子的目的，對隊員來說，為了團隊的勝利而成為一個健全的參與者才是他們的目的。在為了要達到他們目標的過程之中，使用日語的機會增多，最終提升了運用日語互動的能力。也就是說，壘球隊這一個「實踐共同体」的參與方式對於A和B的日語能力提升而言扮演了一個重要的角色。

## 關鍵字：

實踐社群・PAC分析・印象構造・學習／習得・自我成長

## 1. はじめに

筆者は台湾のある大学の日本語文学系（以下、日文系と記す）に2003年8月から2009年1月まで在籍した。大学での生活の中で、かなりの比重を占めていたのが日文系ソフトボール部における活動である<sup>1</sup>。本来、学生のクラブ活動であるチームに5年半の間、選手兼指導者として関わり学生とともに汗と涙を流した。学歴や学業成績が非常に重視される台湾社会において、学業以外に、こうしたクラブ活動に熱心に関わることはさして評価の対象にはならないのが一般的である。その理由は簡単に言えば、クラブ活動、特にスポーツ活動は所詮教室外の遊びであり、本来の学業に励んだほうがいいというものである。こうした発想には以下の2つの学習観が前提として存在する。

- 1) 学習は教室、あるいは図書館、勉強部屋の中で行うものである。
- 2) 学習すべきもの、学ぶべきものは客観的な知識や技術としてあらかじめカリキュラムが作られており、学習者はそれを教師や教科書から学ぶのである。

従来、第二言語教育だけではなく広義の学校教育においても、学習とは個々人の学習者が教室において教師からある知識を学ぶことであると考えられてきた。そこでは、学習とはある個人が客観的な知識や技術を習得することであるとする学習観が「従来の学習の前提」（山下2005:7）とされてきた。レイヴ&ウェンガー(1993)も従来の学習に関する説明を以下の通り指摘している。

学習に関する従来の説明では、知識が「発見される」にせよ、他人から「伝達される」にせよ、あるいは他人との「相互作用の中で経験される」にせよ、そのような知識が内化する過程を学習とみなしていた。（レイヴ&ウェンガー1993:22）

つまり、学習には様々な方法や過程があるにしても、個々人が何らかの知識を自分の内部に取り入れることが学習とみなされていたのである。レイヴ&ウェンガーはこうした学習観に異議を唱えるため状況的学習論という学習観を提示し、「学習を内化として

見るのとは対照的に、学習を実践共同体への参加の度合いの増加」(レイヴ&ウェンガー 1993:25)とみなしている。実践共同体 (community of practice) とは、あるテーマ、仕事 (タスク) などに関する関心や問題などを共有し、集団への参加を通して知識と技巧、技術の修得が可能になる社会的実践が繰り広げられる場、人々の集団のことを指している。さらに、レイヴ&ウェンガー(1993)では、リベリアの仕立て屋における伝統的な徒弟制度を例に挙げて、学習の多くが、職人や上級徒弟の間の相互交流で行われていることを分析し、「学習を参加とみなすと、それが進化し、絶えず更新される関係の集合であるというあり方に注目することになる」(同:25)と述べている。重要なのは、「実践共同体」という概念の下での学習とは、個人が知識や技能を習得することではなく、実践共同体への参加を通して得られる役割の変化や過程そのものであると捉えられることである。

本研究においては、同ソフトボール部の活動をレイヴ&ウェンガーが提示した「実践共同体」における活動と捉え、その活動において、どのような学習や学びが起こっているのかを分析、考察していきたい。そのための研究手法として、本研究では、あるテーマに対する各調査協力者の意識やイメージの構造を明らかにするための手法であるPAC分析を採用する。

## 2. 調査の概要

### 2.1. 調査協力者

調査協力者は、台湾のある大学の日文系のソフトボール部のOB及び現役部員3名である。この3名を調査協力者として選んだ理由は、第一に、ソフトボール部での活動期間が長いこと、第二に、筆者とラポール<sup>2</sup>が形成されていること、第三に、日本語でのインタビューが可能であることである。状況的学習論では、学習を実践共同体への参加を通して得られる役割の変化や過程そのものであると捉えるため、経験がより長い部員の方が調査協力者として適しているといえる。第二点目については、インタビューの際には自己開示が求められるが、調査者とのラポールが形成されている場合には調査協力者の負担もより少なくなる。第三点目に関しては、筆者自身が華語で調査を実施するレベルの華語能力を有していないため調査は日本語を使用せざるを得ないことによる。通訳者を立てるとい

方法もあるが、内藤（2002）は、「面接場面（インタビュー）は、プライバシーを保護し、他者（第3者）に注意が向かうことなく被験者が内省しやすいように、実験者と被験者の2名とすることを原則とする」（同:43）と述べている。よって、これらの条件を満たす部員として本調査の3名に調査協力を依頼した。以下、3名に関して説明を加えたい。

調査協力者Aは2008年6月に卒業したソフトボール部OBである。1年生の最後からソフトボール部に入部した。素質も高かったが熱心な練習態度によってめきめき頭角を表し、程なく中心選手となった。4年次に交換留学生として日本の大学に1年間留学し、その大学の野球サークルで活動してきた。帰国後、1年間、主将としてチームの中心的存在として活躍した。ソフトボール部以外にも活動の幅を持ち、5年次には、第4回全国大学生日本語デイベート大会に大学を代表して出場し、チームの中心的存在として優勝に貢献した。

調査協力者Bは2008年11月現在、大学院に在籍している院生である。2006年に同大文系を卒業してそのまま大学院に進学した。Bは学部の3年生からソフトボール部に入部した。それまではバスケットボール部で活動をしていた。ソフトボール部に入部してからもしばらくはバスケットボール部の活動を続けていた。Bの練習態度の熱心さは部の中でも指折りである。一時期はレギュラーの座をつかんでいたが、2008年11月現在は、部員の増加や下級生部員の実力の向上もあり試合では控えにまわることも少なくない。それでも黙々と練習に励んでいる。

調査協力者Cは2008年11月現在、大学院に在籍している院生である。2004年に同大文系を卒業して兵役に就き、退役後、社会人として仕事の経験を積み、2008年に大学院に入学した。同ソフトボール部創設のメンバーで当時は学部の2年生であった。学部時代の4年次に全台湾日本語関係学科のスポーツ大会で優勝をしたときのレギュラー選手であった。大学院入学後は、B同様に控えに回るようになったが、ほぼすべての練習に参加している。

## 2.2. 研究手法

前述した通り、本研究においては、信州大学の内藤哲雄氏によって開発されたPAC分析を分析手法として採用する。「PAC分析のPACは、Personal Attitude Construct（個人

別態度構造)の略称」(内藤2002:1)である。PAC分析はある「テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する手法である」(同)。本研究がPAC分析を採用した理由は、同分析に「操作的・実験的・(記述)統計学的手法と、間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両者が包含されている」(同:4)ことが挙げられる。浅井(2007)もまた、PAC分析を「ある連想テーマに対して個人が持っている態度や認知の構造について、統計的客観性を保持しつつ個性記述的に研究する方法である」(浅井2007:35)と述べている。つまり、計量的な分析手法と質的な分析手法の両者の特徴を取り入れているため、調査協力者にとっての学習、学びの実態により近づくことができるのではないかと考える。

PAC分析における調査協力者は数名である場合が多く、ときには1名である事例もある。それに対して、限られた調査協力者に対する調査結果から客観的な事実、理論を導き出すことができるのかという指摘もあろう。こういう指摘に対して内藤(2002)は、「個別的普遍性」と「共通的普遍性」という概念で説明を加えている。

ホリスティックな観点では、論理的必然として、普遍性は「個」においてのみ存在し、「個」の違いに応じて多様な普遍性が存在することを是認することになる。この単一事例においてのみ妥当する普遍性を、個別的普遍性と呼ぼう。他方、メカニズムに注目するならば、「個」においても他者と共通する普遍性が存在する可能性がある。こちらは独自の個における共通的普遍性と呼ぶことにしよう。(中略)

特定個人における共通的普遍性の全体は、「全ての人」と「その人を含む一群の人々」に共通する特性内容、「全ての人」と「その人を含む一群の人々」に共通するメカニズムであり、これらの共通的普遍性はその人の統合的独自性の全体集合のかなりの部分を構成していると考えられる、ということになる。それゆえ、特定個人を詳細に分析することは、個別的普遍性だけでなく、共通的普遍性の解明をも目指すことになるのである。(内藤 2002:10-11)

内藤はPAC分析に関し、個別的普遍性だけではなく共通の普遍性を持ち得ると考えているが、筆者もまた、そうした考え方に基礎を置いている。つまり、本研究の調査協力者である3名に対するPAC分析から得られた知見には個別的普遍性だけではなく、共通の普遍性が存在していると考えられる。

現在、PAC分析は多様な研究テーマにおける研究手法として利用されている。内藤(2002)では「性の欲求と行動の個人別態度構造分析」や「学級風土の事例記述的クラスター分析」という研究例が紹介されている。また、日本語教育の分野では、日本語学習者と日本人日本語教師の授業観の比較(安・渡辺・内藤2004)、日本語学習者における自己評価(八若2006、2007)や日本語教材の文化トピックからの学習者の発想(丸山2007)などの研究に利用されている。次節では、本研究におけるPAC分析の詳しい調査手順に関して述べてみたい。

### 2.3. 調査の手順

調査は以下の手順にしたがった。使用言語は日本語である。

- (1) 調査協力者に対して「あなたは〇〇大学日文系のソフトボールチームの活動に対してどのようなイメージを持っていますか」という問いかけ(刺激語)を口頭で与えた。
- (2) 調査協力者に小さなカードを20枚程度渡して、調査協力者が刺激語に対してイメージしたことを自由に連想して一枚に一つだけ書くように依頼した。使用する枚数は何枚でも良いことを伝えた。
- (3) 書き終わったところで、書いたカードに重要な順に番号をつけていくように指示した。1番がもっとも重要なカードとなる。この重要度はイメージ内容が肯定的なものであるか否定的なものであるかは問わないことを伝えた。
- (4) 各カードに書かれたことが肯定的内容(プラスイメージ)であるか、否定的内容(マイナスイメージ)であるか、どちらでもないか尋ねた。
- (5) カードに書かれた自由連想のイメージ同士が、直感的なイメージでどの程度似ているか7段階の尺度で評価してもらった。

- (6) カード間の評価結果をクラスター分析（ウォード法）で処理し、デンドログラム（クラスター分析の結果を示した図）を作成した。デンドログラムを印刷し調査協力者に見てもらいながら、調査者（筆者）と調査協力者が相談の上、デンドログラムをいくつかのまとまりを持つクラスター（集団、グループ）に分類していった。
- (7) 各クラスターに対するイメージや各項目（一枚、一枚のカードに書かれたイメージ）があるクラスターに併合された理由や共通するイメージに関して調査協力者の解釈を質問した。また、各クラスターを比較してもらい、クラスター間の関係を解釈してもらった。さらに、筆者（調査者）が解釈しにくい項目などを取り上げ補足の質問を行った。

以上のプロセスから分かるように、PAC分析は、調査協力者が自由に提示したイメージを基礎に調査を進めていく。したがって、調査者が質問項目を予め準備する調査に比べて調査協力者主体の調査方法であるといえよう。と同時に調査協力者は（7）のプロセスにおいては、統計的に処理されたデンドログラムに基づいて解釈を行わなければならない。この点は、丸山・小澤（2007）が「調査協力者による内省報告は、クラスター構造という刺激によりコントロールされているので、再現性が高く、安定的となる」（同）と述べているように調査結果の信頼性を高めることに繋がるといえるだろう。

### 3. 分析結果

#### 3.1. 調査協力者Aの事例

クラスター分析の結果は図1の通りとなり、2つのクラスターに分類された。

図 1 調査協力者 A のデンドログラム

【 クラスター分析 ----- 基準：ウォード法 】

重要度	距離	
0	7.79	
<b>(クラスター1) 成長</b>		
1)	1.00	心身をともに鍛えてくれる場所 (+)
4)	1.73	礼儀を重視する (+)
2)	3.16	日本語を上達させる課外授業 (+)
3)	6.68	チームワークの大切さを強調 (+)
<b>(クラスター2) 熱血</b>		
10)	2.00	飲む習慣を身につけてしまう (0)
11)	7.79	おやじ軍団 (0)
7)	1.00	量が少ないが、質の高い練習を求める (+)
8)	2.24	練習に励んでいる (+)
5)	5.62	考えるソフトボール (+)
6)	4.00	熱血 (+)
9)	7.79	他の学科チームに国際試合気分を味あわせる仮想敵 (0)

#### 調査協力者Aによるクラスターの解釈

クラスター1は、「心身をともに鍛えてくれる場所」、「礼儀を重視する」、「日本語を上達させる課外授業」、「チームワークの大切さを強調」の4項目である。これらの4項目に対し、Aは「成長」というラベルをつけた。「心身」を鍛えるということばを使用し、インタビューにおいてAはその内容を説明している。「礼儀」に関しては、「うちのチームには日本人が何人かいて、ほとんどが年上ですから、日本語を使いますよね。上下関係が関わってくるでしょう。礼儀を要求されていますから」と語る。この日本人とは3名の日本人教師と1名の日本人大学院生を指しており、すべてAよりは10歳以上年上である。「日本語を上達させる課外授業」に関しては、「日本語での会話のチャンスが多いと

思います。プレー中は会話の授業みたいに考える時間がないので自然にレベルが上がるんです。文法だけじゃなくてことば遣いとか。礼儀を重視することやチームワークもコミュニケーションという意味で日本語と関係してくるんです」と述べている。さらに「日文系だからまずは日本語で頑張る。そういう気持ちが必要で、そうすればだんだん日本語が上達すると思う」と述べた。また、「チームワーク」に関し、Aは「昔は少し苦手だったメンバーともソフトを通じて仲良くなっていきました。試合に勝つためには仲が悪いとか言ってもらえませんから」と述べた。「心身」を鍛えることに関し、「練習が多いので規則正しい生活習慣になるし体力的にも鍛えてくれる」と身体的な鍛錬について語った。

クラスター2は、「飲む習慣を身につけてしまう」、「おやじ軍団」、「量が少ないが、質の高い練習を求める」、「練習に励んでいる」、「考えるソフトボール」、「熱血」、「他の学科のチームに国際試合気分を味あわせる仮想敵」の7項目である。これらの7項目に対し、Aは「熱血」というラベルをつけた。「共通しているのは熱血ですね。汗を流して、終わったらみんなでビールを飲んで、国際試合みたいな激しい試合ができるし」、「おやじ軍団っていうのは、先生や日本人の院生など年上の人ですね。一緒に飲みに行って飲む習慣を身につけたってことです」、「量が少ないが、質の高い練習を求める」や「考えるソフトボール」に関しては「他の学科みたいにだったら練習するよりも質の高い練習をする。日本語学科には男子が少ないから先生も参加していて、だから平均年齢も高くなるでしょう。それでパワーよりも考えるソフトボール、日本の野球のようなやらしい野球をした方がうちにとってメリットがある。考える野球の方が面白いです。例えば、スライディングキャッチするよりも守るポジションを良くして楽に取った方がいい。何をやっているか分からないより考えてプレーしたほうが面白いんです」と述べ、平均年齢が高いチームであるというイメージと質重視の練習、考えるソフトボールを結びつけた。また、「質の高い練習」に関し「勉強にも通用するやり方だと思う。いい方法を考えなければ時間の無駄になるわけですから」と指摘している。さらに「熱血」について「ただ楽しんでやっただけじゃない。自分が何をしているか把握した上でやったら面白い。逆に面白いと思う。あることに夢中になって面白さを楽しめるからこそ熱血だと思う。ある目標を見つけて目標に向かい頑張っていくことが熱血。目標は練習もあんなに一

生懸命にやって、先生も考えるソフトを指導してくれたし、やっぱりそれを利用して試合で勝ちたい。勝ちたいという目標が頭に浮かびますね」と述べている。「他の学科のチームに国際試合気分を味あわせる仮想敵」に関しても「まるで国際試合みたいに思っている他学科の選手がいます。『中日大戦』だって言ってくる選手もいますよ。それで他学科の選手の中には日本語を勉強したくなる選手もいるんです。例えば、大学代表チームのキャッチャーが『「いいよ、いいよ」ってどんな意味?』って聞いてきたんですよ。楽しさがあるから日文系と対戦したくなるんです。それでたくさん友だちができるきっかけになります。普通は大学代表の選手同士しか声を掛けられないんですが、日文系には代表選手はいないけど声を掛けてくるんです。いろんな意味で国際交流になっているんです」と語った。

クラスター1と2の比較に関し、Aは明確に「2の熱血は過程で、1の成長は結果です」と言い切った。

### 総合的解釈

Aの語りにおいてはソフトボールの活動の過程と結果に関するイメージが提出されている。Aが過程で大切にしているのは頭を使って考えることによる質の高さであろう。そうした質の高さをソフトボールの活動を通して身につけていったのである。「質の高い練習」に関し「勉強にも通用するやり方」であると述べているが、この点に関連して、Aは調査を離れた私的な会話で筆者に台湾におけるスポーツ軽視、学歴・成績至上主義には賛成できないのだが、自分自身、高校までの教育が染み付いてなかなかそれを払拭できなかったということを述べた。Aはソフトボール部の活動を通して、自分自身が長年抱いていた観念から卒業していったのであろう。ソフトボールには、特別なカリキュラムは存在せず、学ぶべき具体的な知識や技術のリストも存在しない。しかしながら、Aは「実践共同体」としてのソフトボール部での活動を通じて、質の高い練習を求め、考えるソフトボールを実践しながら、勉強にも通用するやり方を学び、大学におけるスポーツ活動の意義を見出していったものと考えられる。また、日本人教員や院生の存在がチームの特色になり他学科から注目されていることを肯定的に捉えていることも分かる。そうした過程か

ら導かれる結果としてAが挙げているのは心身の鍛錬と日本語能力の上達である。Aが考える心身の鍛錬における「心」とは礼儀とチームワークの重視である。一緒に活動している教員や日本人の院生が年上であるから日本語を使用するのが礼儀であるとAは捉えている。それが「日本語を上達させる課外授業」に繋がっているものと考えられる。また、日本語能力の向上に関するAの指摘は非常に興味深い。練習や試合中の会話は確かに会話の授業のように考えてから話すわけにはいかない。「プレーは常に動いているから」である。それを日本語会話能力の向上の機会とAは捉え、実際に、日本語能力を飛躍的に向上させていった。Aは前述したように全国大学生ディベート大会においてもチームの中心的存在としてチームを優勝に導いた。ディベートもソフトボール同様にゆっくり考えてから話すことはできない競技である。ソフトボール部の活動で養った思考力と常に動いている状況の中で瞬間的な判断を要求される日本語能力、質の高い練習を求める姿勢、そしてチームをまとめるチームワークの能力がディベート大会でも発揮されたのであろう。



にも有利になるし、他学科の学生から見ると先生と学生が一緒にやっているのも羨ましいそうです。倫理の重視は、ソフト部の中には先生や先輩も多くて倫理が重視されています。例えば、試合中にファールボールがグラウンドの外に飛んだとき攻撃側が取りに行かなくてはならないんですけど、それを後輩が取りに行くとか。こういう考えがあれば社会人になっても有利だと思う。だから、これも能力の一つだと思います」とAは概観した。さらに、Bは日本語能力に関し以下のように指摘している。「ソフト部に入ると日本語を使う機会が増えて日本語能力が上がる。練習のとき日本語を使うのは会話練習とは全く違う。会話練習は場面設定とか考えてから話す。でも、練習のときはすぐに、瞬間的に考えなければならない。それにソフト部の中で日本語を使うトピックは会話練習をはるかに超えている、例えば、飲みに行ったときのいろいろなくならない話もコミュニケーションとしてはなくてはならないことでしょう」と語った。このように、日本語使用に関する瞬間性はAの指摘に非常に似ている。

クラスター2は、「先生の影響が多い」、「お酒好き」、「練習後はビール」、「学部生と大学院生とも一緒に活動できる活動」、「平均年齢より高い」の5項目であった。Bはこのクラスター2に「団体活動」というラベルをつけた。Bは全体の印象を「絶対一人ではやれない。みんなで一緒の方が楽しい。日本人の習慣というか仕事が終わってからビールを一本というような考えを身につける。今のソフトボールチームの構成は先生や院生が多くて社会人チームみたい。だから、団体活動はどうやったらうまくいくか分かっているはず」と述べた。

クラスター1と2の関係について、Bは「人間関係をうまく作るという点で両方繋がっている。ソフトボールというスポーツは一人ではやれないんです」と指摘した。

## 総合的解釈

Bはクラスター1を「頭を使うプレーする活動」、「練習が必要」、「日本語能力が必要」、「教室では学べない日本語が学べる」、「学生と教師との共同活動」、「別の学科のソフトボール部は日本語学科ソフト部が羨ましい」、「倫理を重視する」の7項目としたが、デンドログラムを見た限りでは、「頭を使うプレーする活動」、「練習が必要」の

2項目と「日本語能力が必要」、「教室では学べない日本語が学べる」、「学生と教師との共同活動」、「別の学科のソフトボール部は日本語学科ソフト部が羨ましい」、「倫理を重視する」の5項目は分かれているように思える。前者は、頭を使うプレーをするために練習が必要になるというソフトボール技術に関わるクラスターであり、後者は、学生と教師がともに活動することで日本語能力が必要になり、教室では学べない日本語を学ぶことができるという日本語能力に関わるクラスターである。しかしながら、Bはこの2つのクラスターを「能力育成」という共通項で結んだのである。

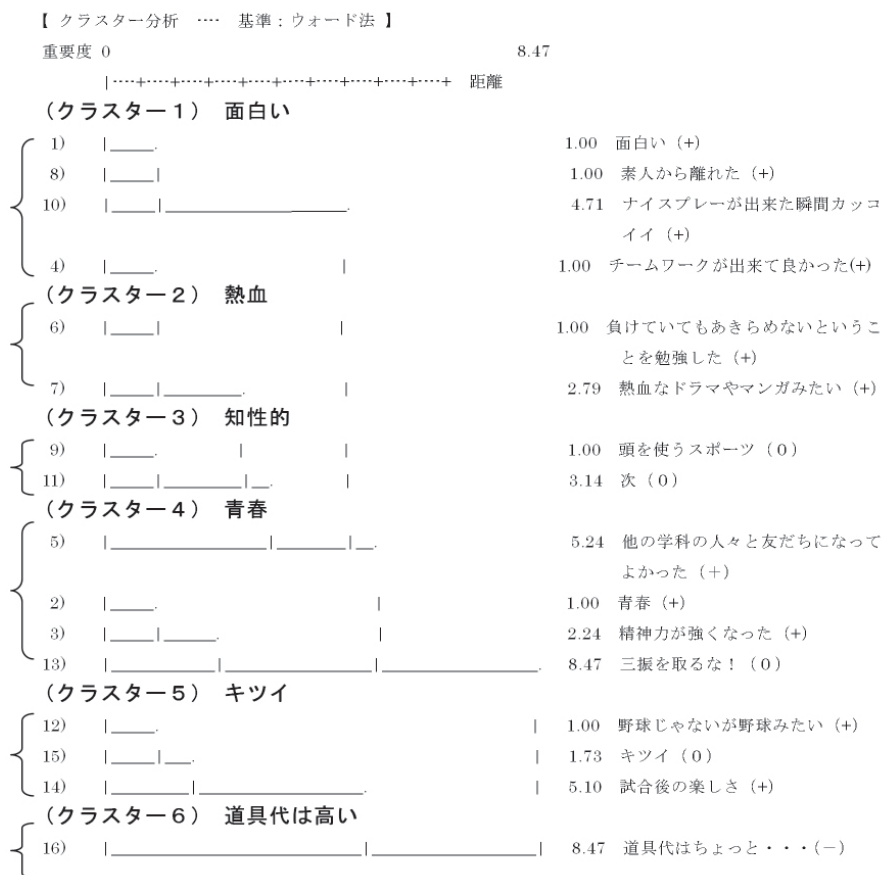
Bのイメージや自己評価は、Aと重なる部分が少なくない。「頭を使うプレー」や「日本語能力が必要」、「倫理を重視」は、Aが挙げた「考えるソフトボール」、「日本語の上達」、「チームワークや礼儀」とほぼ一致している。日文系には男子学生が少ないので部員を集めるのは容易ではない。したがって、部員の中には体格的、体力的に恵まれていない者が少なくない。そういうチームが勝利を収めるためには頭を使ったプレーを意識し練習に励むしかないというBの姿勢が窺える。また、非常に興味深いのは戦術としての日本語能力である。Bが指摘しているように試合中に日本語で指示を出しても相手チームの選手は理解が出来ない点はこのチームにとって大きな力になる。例えば打者に対して「ピッチャーのコントロールが悪くなってきたから1球待つて」とかランナーに対して「次、走って（盗塁して）」などの指示が声で出せるのである。両チームが共通言語を持っている場合、こうした指示を声で伝えることはあり得ず、確かにBが指摘するとおり日本語力は戦術的な資源となっている。ここでは日本語は学ぶこと自体が目的とされているのではない。あくまでも戦術的な資源として日本語は位置付けられているのである。「実践共同体」としてのソフトボール部への「参加の度合いの増加」によって日本語が戦術的な資源となっていることが深く理解され、日本語の学習、学びが生まれるのである。レギュラー選手だったBが後輩の台頭などで次第に控えに回ることが多くなっていた当初、「悔しさでいろいろ考えることも多かった」Bは、「今でももちろん試合に出たい」が「状況を理解して試合に出られなくても頑張るようにしている」と語っている。Bは体格的にも技術的にも特別に秀でている選手ではないかもしれないが、頭を使うプレーや高い日本語能力で不足分を補おうとしている姿勢自体に自己の尊厳を持っているのではないだろうか。だ

からこそ、控えに回ることが多いBがクラスター1に挙げたイメージがすべてプラスのイメージとなっているものと考えられよう。

### 3.3. 調査協力者Cの事例

クラスター分析の結果は図3の通りとなった。

図3 調査協力者Cのデンドログラム



調査協力者Cによるクラスターの解釈

Cはクラスターを6つに分類した。

クラスター1は、「面白い」、「素人から離れた」、「ナイスプレーが出来た瞬間カッコイイ」、「チームワークが出来てよかった」の4項目である。「素人から離れた」の

意味は「学部の2年生のときは全然できなかった。キャッチボールも速い球はこわいという感じだった。ソフトも野球もやったことがなかった。高校時代は体育の授業が1学期に2時間か4時間しかなくてソフトボールがあったんだけど、本当に適当な感じで、野球やソフトボールは見るだけのものだった。そういう状況からだんだん上手になっていった」とのことである。Cはクラスター1に「面白い」というタイトルをつけた。「チームワークがあって、ナイスプレーができて、素人から離れたこと、これはすべて面白いことでしょう」と述べた。「チームワークはことばでは説明しにくいですね。つまり、試合のときにいちいち言わなくてもプレーで助け合ったりするでしょう。そういう感じ」。

クラスター2は、「負けていてもあきらめないということを勉強した」と「熱血なドラマやマンガみたい」の2項目である。このクラスター2にCは「熱血」というラベルをつけた。「初めて大日盃（全台湾日本語関係学科スポーツ大会）に出場したときはT大学に32対0で負けたんです。リードされてすぐにあきらめていた。でも、だんだんリードされていても逆転できるという気持ちになっていった。元々はリードされたら終わりという感じだったんです。3年生のときの大日盃（Cにとって2回目の出場 筆者注）では、最後は負けたけど2点差までいってそんなに悪くないと思った。ドラマやマンガは、特に野球マンガはほとんど流れとして、リードされているか大ピンチで最後に逆転とか勝利する感じで、あきらめない気持ちになったのとそういう熱血マンガのイメージが近いんです」とCは説明した。

クラスター3は、「頭を使うスポーツ」、「次」の2項目で、Cはこのクラスターに知性的」という名前を与えた。「スポーツはほとんど頭を使うんだけどソフトや野球は特に使っている。相手の特徴に合わせて戦術を変化させる。つまり、力だけでは勝てない。あの中国語のことわざで外行看熱鬧、内行看門道っていうのがあるんですけど、それが分かりました。外行看熱鬧、内行看門道は、素人はワーワーというにぎわいを見て、プロはその中身を見るということですけど、元々は自分も外行だったんです。「変化が出たのは3年生の2学期のとき、先生が連れてきた他の学校の学生が色々な知識などを教えてくれたんです。また、『次』というのは一つのプレーが本当に終わると思っててもまだ次のプレーがある、つまり色々な変化があるという心構えのことです」と2つの項目の関連性を述

べた。

クラスター4は、「他の学科の人々と友だちになってよかった」、「青春」、「精神力が強くなった」、「三振を取るな！」の4項目である。このクラスターにCは「青春」というラベルをつけた。「元々、知らなかった人と友だちになって青春だなあって思う。青春の中で少しずつ精神力が強くなったような気がする。元々は慢塁（マンレイ）<sup>3</sup>でしょ。遅い球なのに三振を取られたら恥ずかしくてヤバイという感じ。精神力が弱いから三振を取られた。自分も本当に悔しい三振を取られたことがあった。あれは自分でも未熟だと思った」とCの中では4つの項目が確かに相互に関連しているようである。

クラスター5は、「野球じゃないが野球みたい」、「キツイ」、「試合後の楽しさ」の3項目で、Cはこのクラスターに「キツイ」という名前を与えた。「やっぱり、ソフトボールは野球じゃないがほとんど野球みたいでしょう。いろんな練習があつて叱られて肉体的なきつさもあるし精神的なきつさもあるし、きつさがなければ、試合後の楽しさがないと思います」。「キツイはマイナスになってないのはなぜ」との筆者の問いに「キツイからこそ素人から離れたんです」とCは答えた。

クラスター6は「道具代はちょっと・・・」の1項目である。「特に消耗品のボールなんかは高いと思う」とのことである。

続いてクラスター間の比較に移る。クラスター2「熱血」とクラスター4「青春」の違いは、熱血はそのとき、その瞬間に、テンションが上がっていることであり、青春は記録・記憶のようなイメージであり、歴史があつて今も続いている感じであると述べている。また、クラスター1「面白い」、クラスター4「青春」、クラスター5「キツイ」は「非常につながりがある。青春はつらさもあつて面白さもあるから青春でしょう」と述べ、クラスター2「熱血」とクラスター3「知性的」は「正反対けどつながりがある。熱血があるからこそ、どんどんやる気がある。でも、クールにしないといけないから両方必要でしょう」と語っている。

#### 総合的解釈

CもA、Bと似たイメージを挙げている。「頭を使うスポーツ」というのはA、Bに共通し

ている項目である。また、チームワークや精神力、他学科との交流、熱血というイメージに関してはAと共通している。A、Bと異なる特徴は「面白い」を挙げていることである。しかも、重要度の一番に挙げている。この点がCの特徴ではないかと思われる。A、Bにおいては、心身の鍛錬とそこから得られる成長が基調となっていた。しかし、Cは面白さを前面に提示している。インタビューの中で、Cは「だって、面白くなければやらないでしょう。当然でしょ」と言い切っている。プレー技術を向上させるのも、チームワークも、あきらめない心も、知性を持ったプレーも、つらさに耐えるのもすべては面白さを感じることができるからなのである。「ナイスプレーが出来た瞬間カッコイイ」や「三振を取るな！」など自分自身のプレーに対するイメージが見られるが、面白さをC自身の個人的な面白さと捉えているため、自分自身のプレーを中心に思い描くのであろう。つまり、チーム中心の思考をするA、Bと、チームもまた個々のメンバーの面白さのために存在すると考えるCとの差異が垣間見えるのである。

クラスター4をCは「青春」と名付けた。前述のようにCは「青春は記録とか記憶のようなイメージ。歴史があって今も続いている感じ」と語っている。学部卒業後4年を経た後、大学院に入学したCであるが、ソフトボール部での青春はずっと続いているという。その理由を尋ねると「兵役時代にしても、仕事をしているときも休みのときに時々、練習に来ていたでしょう。だからずればあまり感じなかったんです」と答えた。つまり、ソフトボール活動はCにとって、学部生時代、兵役時代、社会人時代、大学院生時代が一貫した青春時代であると考えられるための媒体になっているのであろう。

#### 4. 総合的考察

ここまでPAC分析によって、ソフトボール部の活動に対する個々の部員の評価を見ると同時に考察を加えてきた。そこから、個々の部員がソフトボールを単なる余暇を過ごすための活動とはみなしていないということが明らかになった。また、個々の部員が学生生活の中でソフトボールの活動を明確に位置付け、自己の成長に結び付けて捉えていることも分かった。例えば、Aはソフトボール部の活動を、心身を鍛える場所であり成長の場であると考えている。Bも頭を使った練習、日本語能力の向上、倫理の重視など広い意味での

能力育成の場として理解している。一方、CはAやBとは異なり活動を鍛錬の場というよりは、面白さのために技術を磨き、精神力を高める場であると捉えている。こうした3名に共通しているのは、ソフトボール部の活動において何らかの学び、学習が起こったことである。

ここで、ソフトボール部の活動における3名の学習、学びをレイヴ&ウェンガーによる状況的学習論の視点から捉えなおすことにしたい。1章で述べたようにレイヴ&ウェンガー(1993)は「学習を内化として見るのとは対照的に、学習を実践共同体への参加の度合いの増加」(同:25)とみなしている。そして、学習に関して実践共同体の「十全的参加者になること、成員になること、なにがしかの一人前になることを意味している」(同:29)と明確に述べている。こうした観点からソフトボール部における3名の歩みを捉えなおすと、ソフトボール部という実践共同体の十全的参加者になるために「練習が必要(B)」であり、十全的参加者になる過程で「量は少ないが、質の高い練習を求める・考えるソフトボール(A)」、「頭を使うプレー(B)」、「頭を使うスポーツ(C)」を学び「一人前」になっていった(「素人から離れた(C)」)ものと考えられる。そして、ソフトボールという実践共同体は学生にとって「心身をともに鍛えてくれる場所(A)」であり「学生と教師との共同活動(B)」の場なのである。また、レイヴ&ウェンガーの学習観に立てば、AとBはソフトボール部の活動で必要とされる日本語能力を教師から知識として学んだのではなく、実践共同体としてのソフトボール部への参加の度合いが増加し「十全的参加者」になるに従って、日本語による相互行為能力を高めていったと考えられる。ここで重要なのは、日本語能力を高めることが実践共同体としてのソフトボール部に所属する各部員の目的ではなく、チームの勝利のために貢献できる十全的参加者になることが目的であるが、目的達成のための過程において日本語を使用する機会が増え、結果的に日本語による相互行為能力が高まっていったことである。ソーヤ(2006b)は、日本の理系の大学院に留学している留学生が研究室の実践のコミュニティーへどのように参加していったかを明らかにすることを研究目的としているが、「結果として、実践のコミュニティーへの参加のあり方は、第二言語の学習にとって重要だということが明らかになった」(ソーヤ2006b:117)と述べている。この点からも、AやBは勝利を目的としたソフトボール活動を

通し、考えるソフトボールや礼儀、チームワークを身につける過程で結果的に日本語能力を向上させたものと考えられる。つまり、ソフトボール部という「実践のコミュニティーへの参加のあり方」がAやBの日本語能力向上にとって重要な役割を果たしたといえるのである。

状況的学習論では、個々人の学習は、共同体の再生産、変化のサイクルの中にあるとされている。実践的共同体における個人の参加（＝学習）が「十全的」になるにつれて、共同体自体も変容していくとされている。そういった意味で、本稿で記述した調査対象者のインタビュー内容は、単に個人の意識構造を明らかにしたものではなく、そのような意識構造自体が実践共同体的あり方とその変容ともつながりを持っている。こうした観点から見れば、日本語での相互行為自体が共同体の変容にも影響を及ぼし得る要因になっているといえるだろう。つまり、日本語を媒介としたクラブ活動が個々人の日本語での相互行為能力を高めるという方向だけではなく、日本語を含めた相互行為自体が実践共同体としてのソフトボール部の変容と再生産をもたらしているのである。この点が、狭い意味での日本語に関する知識や技能の習得を目的とする従来の教室型の活動との大きな相違点であるといえよう。

今後の課題として、同ソフトボール部において更に多くの現役部員、OBを対象にした調査を実施していくこと、更には、他のクラブ活動に参加する学生に対する調査を実施することで教育機関におけるクラブ活動の意義と活動を通しての学びを明らかにしていくことが必要である。

（まつおしん 東京女子大学現代教養学部）

## 注

- 1 2008年11月現在、部員は29名のうち22名は選手（全員が男子）、7名はマネージャー（全員が女子）であった。選手の中には教員が3名含まれている。台湾では通常、各学科にバスケットボールやバレーボール、ソフトボールなどのチームが大学代表のチームとは別に組織されている。2008年11月現在、同ソフトボール部は週に2日練習を行っていた。

- 2 「ラポール」は、フランス語で「橋を架ける」という意味である。つまり、ラポールがある状態とは心と心の間に橋が架けられ、互いの心が通い合っていること指している。
- 3 慢塁（マンレイ）は、投手が遅い球を投げなければならない、投手が投げる球が打者の身長よりも高い位置から落ちてこなければならないというルールがある。

## 参考文献

- 浅井健史（2007）．「グループ運動表現療法におけるリーダーの態度構造と継時的変化 ―初心リーダーを対象として―」、『明治大学心理社会学研究』第2号、2007年、pp. 34-42.
- 安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄（2004）．「日本語学習者と日本語教師の授業観の比較：個人別態度構造分析法(PAC)による事例研究」、『茨城大学留学生センター紀要』、第2号、茨城大学留学生センター、pp. 49-59.
- ソーヤーりえこ（2006a）．「社会的実践としての学習 ―状況的学習論概観―」、（上野直樹・ソーヤーりえこ編）、『文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスデザイン』、凡人社、pp. 40-88.
- ソーヤーりえこ（2006b）．「理系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化」、（上野直樹・ソーヤーりえこ編）、『文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスデザイン』、凡人社、pp. 40-88.
- 内藤哲雄（2002）．『PAC分析実施法入門 [改訂版] 『個』を科学する新技法への招待』、ナカニシヤ出版.
- 八若壽美子（2006）．「インドネシア人留学生の日本語学習の自己評価 ―PAC分析による事例的研究」、『茨城大学留学生センター紀要』、第4号、茨城大学留学生センター、pp. 13-21.
- 八若壽美子（2007）．「韓国人学部留学生の日本語学習における自己評価の変容」、『茨城大学留学生センター紀要』、第5号、茨城大学留学生センター、pp. 41-52.
- 丸山千歌（2007）．「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想」、（小川貴士編）、『日本語教育のフロンティア 学習者主体と協働』、くろしお出版、pp. 161-184.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2007）．「日本語教育におけるPAC分析の可能性と課題 ―読解教材を刺激とした留学生への実践研究から―」、WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』

2007年度日本語教育実践研究フォーラム、日本語教育学会、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/Forumhoukoku/maruyama.pdf>

山下隆史 (2005) . 「学習を見直す」、(西口光一編)、『文化と歴史の中の学習と学習者』、凡人社、pp. 6-29.

レイヴ, ジーン&ウエンガー, エティエンヌ、佐伯胖訳 (1993) . 『状況に埋め込まれた学習』、東京図書. (原著は1991年に出版, Lave & Wenger, Situated learning : legitimate peripheral participation, Cambridge University Press)

Sfard, A. (1998) . On two metaphors for learning and the danger of choosing just one. Educational Researcher, 27(2), pp. 4-13.